

# 哲学館創立の原点

明治十七年秋、井上円了の東本願寺への上申書(下書き)

## 三浦節夫

*miura setsuo*

### 一 はじめに

東洋大学の歴史は、明治二十年の哲学館の創立に始まるが、創立者の井上円了が、何時、どのような目的で、学校の設立を決意したのか、という「原点」については確かなことがわかっていない。

筆者は東洋大学百年史の編纂に関係したが、その時点でも円了の「哲学館の創立の原点」にあたる決定的な資料はなかった。しかし、筆者が注目していた資料はあった。それは、本稿のサブタイトルに記した井上円了の「東本願寺への上申書」であった。そのため、上申先の東本願寺(真宗大谷派)にこれまでに何度か調査を依頼して来たが、「現在のところ資料の存在はわからない」という回答にとどまっていた。

ところが、最近、筆者が円了の大学時代のノートを調べていたところ、偶然にも、その上申書の「下書き」に相当するものを発見した。その下書きは、「修学ノ科目并ニ将来ノ目的ニ付奉申候 愚侶輩」と題する文章である。本稿はこの新資料を紹介して、東洋大学史や井上円了研究などに、新たな問題を提起しようとするものである。この新資料がどのような意味を持つのか、それを確認するために、はじめに、これまでの「哲学館の創立」についての見方を述べ、つぎに新資料を紹介することにした。東洋大学史はこれまでに五十年史、八十年

史、百年史の三種類がある。これらの年史の中で、「哲学館の創立」がどのように捉えられてきたのか、それを見ておこう。

## 二 『東洋大学創立五十年史』

初めの『東洋大学創立五十年史』は、昭和十二年（一九三七）に出版された。初めて編纂されたこの五十年史の目次をみると、

### 第一章 創立精神

### 第二章 沿革史

#### 第一節 私立哲学館時代

#### 私立哲学館の創立

#### 創立者

#### 麟祥院仮校舎時代

と続いている。このように、第一に重視されたのは創立の精神である。

その「第一章 創立精神」では、この五十年間にわたり「我が東洋大学の根柢を築くものは、創立者井上円了先生の護国愛理の大信念である。」（一頁、以下同じく、引用文の下に頁数を示す）と位置づけている。そして、「抑々護国愛理とは何ぞや、是れ一の幽玄なる真理にして、所謂日本国民の悉く之を把握し、普く之を実践せざるべからざる大道である。」と述べて、円了が初めて「護国愛理」を記述した著書である『仏教活論序論』の冒頭を引用している。最後に、「井上先生の一片皓々たる護国愛理の精神は、即ち凝つて哲学館の創立の精神と

なつたのである」(三頁)と規定している。

このように、五十年史は編纂された時代がいわゆる十五年戦争の最中で戦争遂行の時代思想が支配的であり、また当時の学長(大倉邦彦氏)が超国家思想を重視していた、という二つが編纂に色濃く反映しているように考えられる。そのことはまた、「第二章 沿革史」の「第一節 私立哲学館時代」の「私立哲学館の創立」にも見られる。「其の哲学館を創立せる所以のものは、決して単純なる思想觀念から出発したのではない。」(五頁)として、円了の明治二十六年の「教育宗教関係論」から「其方針とする所は、教育の方は日本主義を取り宗教の方は仏教主義を取ることとなせり」(五頁、著書のカタカナを仮名に変更、以下同じ)と引用して、「我国古来の諸学、即ち東洋学を基本とし、之と西洋学を比較研究して日本独特の学風を振起し」(六頁)ようにしたのであると述べている。

五十年史では、円了の哲学館創立を明治二十年前後の日本の思想界(欧化主義)と、円了の思想信念に求めている。その結節点が明治十七年の哲学会の創立であり、「此会の設立こそ井上先生が後年哲学館を創立すべき大いなる素地となつたのである。」(八頁)という。そして、欧化主義時代にキリスト教の布教が盛んになり、「我國の所謂国粹保存主義者の頗る憂ふる所となり」(九頁)、仏教徒は不満を高め、「その反動として或は皇権の尊厳を説き、或は国粹の保存、国風の発揚を絶叫するなど、国内の輿論は漸次昂まるに」(九頁)至り、「斯る社会情勢は井上先生をして一躍飛躍せしめずんばやまなかつた。」(十頁)とし、私学はあつても「実学」に偏り、「真に我國の国情と国体に即し仁義道徳を振興する学校は一つもこれなき状態である。先生は茲に於て愈々機の熟せるを見て、遂に哲学館の設立を企画し、明治二十年六月之を世に発表するに至つた。」(十頁十一頁)それが「哲学館開設ノ旨趣」であると述べている。

このように、五十年史は創立の「理念」を根底に書かれたものである。創立の過程はその「理念」との関係で叙述されているのみである。「哲学館の創立は……実に時代精神を経とし、国家的見地を緯とし、而して井上先生的一片皓々たる『護国愛理』の大精神に立脚して設立されたものなることを知るべきである」(十一頁)と、哲学館の創立の原点は、円了の「護国愛理の精神」にありという立場を徹底したものとなっていて、事実関係もその点に限定されているという問題がある。

### 三 『東洋大学八十年史』

つぎの八十年史は、戦後の昭和四十二年(一九六七)に刊行された。戦前の五十年史とどのように異なったのであろうか。その目次から哲学館の創立関係をみると、

#### 前編 哲学館時代

##### 第一章 哲学館の創立まで

###### 第一節 哲学館創立の背景

###### 第二節 井上学祖と哲学館の構想

###### 六 大学卒業と哲学館の構想

#### 第二章 哲学館時代

##### 第一節 哲学館の創立

となっている。

八十年史の冒頭に、「哲学館創立の背景」がまず取り上げられている。そこでは「文明開化」、「儒教と仏教の

凋落」、「西洋思想の受容」、「日本主義の台頭」の順に述べられている。とくに注目されるのは「西洋思想の受容」であり、その結論部分で、つぎのように哲学館の創立との関係を位置づけている。

「以上が明治維新から、哲学館創立に至るまでの社会的、思想的状況であるが、これが学祖井上円了を育成する風土となり、したがって哲学館創立の背景をなした重要なものであった。すなわちこの期間は、学祖の年齢でいえば十一歳から三十までの間で、だいたい修学時代にあたる。この二十年間は欧化主義の時代であったから、学祖をして哲学館を創立しなければならぬ必然性を形勢せしめた。」(六頁)

このように八十年史は、明治二十年までの社会的・思想的なものが哲学館創立の背景であったという。そして、具体的に円了の修学過程を述べて、東京大学の卒業と哲学館の構想へと進む。「学祖は本願寺の東京留學生であったので、卒業後は本山のある京都へ帰って、教師教校の教授になるよう命令があった。しかし、学祖は仏教の勢力を挽回するには俗人となって活動することが便利であり、なお自分には学校設立の素志があることを具申して、その命令を固辞した。再三再四の往復交渉が行なわれ、その結果、ようやく俗人として活動することが認められた。」(十五頁)という。それ故に、恩師の石黒忠恵からの文部省への就職斡旋を固辞したと述べている。そして、「大学卒業の翌十九年春には、病氣のため熱海に転地療養し、ここで学園創立の構想をねった。」(十六頁)という。

八十年史の記述はこのように具体的になつてはいるが、典拠となつた資料が明示されていないため、後に資料に基づいて編纂された百年史と比較すると、誤記や誤認が見られる。熱海での構想の時期も、百年史と異なる。

ともあれ、哲学館の創立が大学卒業のときに「学校設立の素志があることを(本願寺へ)具申し」たということとを明らかにしている。その結果、「学祖が哲学館を創立したい」という意図は、すでに大学在学時代にあったと

いわれ、その具体的な構想ができあがったのは、熱海で病気を養った間であった。」(十七頁)と要約している。この構想を、はじめに加賀秀一に、つぎに柵橋一郎に相談した。その柵橋の回想から、八十年史は「哲学館創立の動機は、学祖の一貫の信念である、排仏毀釈の運動やキリスト教の伝播による仏教の衰退を、復興しようとする底意から、僧侶に哲学を教えんとしたものである。」(十七頁)と結論づけている。

第二章の冒頭の「哲学館創立の動機」では、明治以来の西洋文化の移入に当り、一般的にはその根底に「哲学」があることを知らず、「根のない文化」(十九頁)なっていることを、円了は「文化の根としての哲学の重要性に想到し、この学問の普及、宣伝の必要性を痛感した。」(十九頁)と述べている。ここに動機を求めているが、具体的には「学祖は、明治十七年に哲学会をつくり、十九年には『哲学会雑誌』を発行して、その普及に努めようとした。しかし、それにあきたらず、翌二十年には、哲学館を創立するのである。」(二十頁)という。「しかし、その源流は、すでに東京大学における哲学研究会にあった。」(二十頁)と、明治十五年頃に友人と結成した研究会を源流として重視している。(百年史ではこの研究会を取り上げていない。八十年史では哲学研究会↓文学会↓哲学会への発展を記している)。

このように、八十年史は「哲学研究会と同一の精神を、学園という形で徹底しようとしたのが、哲学館の創立で、そのことを学祖は哲学館創立趣意書において次の如く述べている。」(二十二頁)として、「哲学館開設ノ旨趣」を引用している。

八十年史は、五十年史のような「護国愛理」の理念から歴史の編纂を行なわず、ある程度の資料に依拠しながら創立の過程を記述しようと試みている。しかし、すでに述べたように、典拠となる資料をすべて明示しないこともあって、仮説ないし推測に止まっているという問題がある。哲学館の創立の原点については、東本願寺への

具申の中に「学校設立の素志」がありという記述があるので、その素志は大学在学時代にあったと見ている。その素志をつくった大学在学中の源流は「哲学研究会」にありという見方である。この研究会の「精神」が哲学館の創立の精神として具現化したと位置づけられている。こういう図式的理解に問題があることは、つぎの百年史で明らかにされる。

#### 四 『東洋大学百年史』

百年史はそれまでの年史の一巻本と異なり、資料編、通史編、部局史編、年表・索引編の八巻で構成されたもので、昭和六十三年（一九八八）から平成七年（一九九五）までに刊行された。すでに五十年史、八十年史が存在し、その成果を批判的に吸収し、資料編があるように、客観的な記述を目指したものである。哲学館の創立の過程は「通史編 I」に取り上げられている。その関係する目次をみると、

##### 第一編 創立者井上円了と私立哲学館

###### 第一章 創立者井上円了

###### 第四節 東京大学で哲学を学ぶ

###### 四 卒業と針路

##### 第二章 私立哲学館の創立

###### 第一節 創立前後

###### 三 哲学館創立構想

###### 第二節 麟祥院仮教場で開館

となっていて、創立者井上円了の誕生から哲学館の開館に至るまでなど、時間の経過を忠実に跡付けている。

百年史で哲学館の創立に関することが最初に取り上げられているのは、第一章の第四節の「四 卒業と針路」の項である。この項目では、「卒業論文『読荀子』」、「学位授与式」、「本山奉職の固辞」、「不思議研究会」の四つがあるが、哲学館の創立に関わる項目は三番目の「本山奉職の固辞」である。

この「本山奉職の固辞」で、最初に資料として位置づけられているのが、卒業にあたり恩師の石黒忠恵が斡旋した文部省への就職である。百年史の引用はつぎのようになっていいる。「御思召は誠に有難いですが、素より私は本願寺の宗費生として大学に居た事であるから官途に就くに忍びないのみならず、且つ日頃の誓願として、将来は宗教的教育的事業に従事して、大に世道人心の為に尽瘁して見度い心懸だから……」(五十三頁)と、八年史でも言及している石黒忠恵の回想を資料として挙げている(1)。

そして、この資料の内容から百年史では、卒業にあたり「すでに井上円了には生涯の仕事として何をなすべきかすすむべき道がはっきり定まっていたのであろう。」(五十三頁)と推測している。その根拠として、百年史は東本願寺の教団の命令に対する円了の対応をつぎのように述べている。「教団は井上円了に母校の教師を命ずるが、井上円了は『仏教の類勢を挽回するには僧門を出で、俗人となり、世間に立ちて活動せざるべからざる理由と東京に止まり独力にて学校を開設せん志望』を述べて、それを固辞した。」(五十三頁)

ここで引用された資料は、円了自身が書いた文章で、百年史の『資料編 Ⅰ上』(2)に収録されたものである。石黒忠恵の回想と円了の文章を対応させて、卒業に際しての円了の考えを立証しようとしている。教団は円了に「印度哲学取調掛」を命じたが、「その後も『再三再四問答』の往復が教団との間で交わされ、ようやく本山の承認を得て教団から「円了は」自由の身になった。教団との交渉がいつ頃まで続いたのか、はっきりしないが、哲

学館創立直前まで続いたともいわれている。」(五十三～五十四頁、「」は筆者)、と百年史は記述している。

このような百年史の記述をみると、本稿が問題とする哲学館の創立の「原点」は、大学卒業にあたり円了と教団との間で行なわれた交渉に関係していると考えられるが、百年史では円了の志望は「はっきり定まっていたのであろう」とするが、交渉がいつまで続いたのか「はっきりしない」と書いている。ここに決定的な資料が不足していることを表している。

この問題は、「第二章 私立哲学館の創立」の「第一節 創立前後」で再び言及されている。その「第一節 創立前後」では、いくつかの項目を立てている。

「一 仏教啓蒙運動の開始」では、「新政府の宗教政策」、「仏教界の諸動向」、「井上円了の破邪顕正活動」、「真理金針」の出版、「『仏教活論序論』の出版」、「哲学書院の設立」を取り上げている。「二 日本主義と政教社」では、「欧化主義の風潮」、「政教社の結成」、「『日本人』と国粹保存主義」、「井上円了と『日本人』」を取り上げている。

そして、「三 哲学館創立構想」では、「東本願寺留學生たちの交流」、「井上円了の計画」がある。本稿と直接関係するのはこの項目であるが、最初の「東本願寺留學生たちの交流」では、円了を第一号とする東本願寺の留學生たちを紹介し、そのリーダーが円了であること、そしてこれらの留學生に先んずる同じく留學生の親睦会「樹心会」(毎月一回開催)、及びこれに西本願寺系の人々が加わった「致遠会」があったことを明らかにしている。このようにして東本願寺の円了を中心とする新留學生たちは「密接な連携を保っていた。」(七十六頁)という。こうした中から、学校の設立が提起されたことを、百年史は資料③を要約してつぎのように述べている。

「一八年の春、東本願寺の留學生たちは、いずれも東京大学または予備門に在学していた。そこで、卒業後の

将来の方針について相談がおこなわれ、卒業後は東京で留学生の組織による学校を開き、大谷派のために力を尽くそうということになって、その準備のため各自が研究すべき学科の分担を決めた。井上円了はヘーゲル哲学、徳永満之はカント哲学、柳祐信は国語と哲学、柳祐久は歴史と国文学、今川覚神は数学と物理、稲葉昌丸は動物学とそれぞれの研究分野を定めた。そして、この協議の結果を書面で本山へ上申したという。」(七十六頁)

本稿で取り上げる「上申書」とは、実はこのことに他ならない。ただし、提出の時期は異なる。百年史では、この円了を中心とする東本願寺の留学生の動向を重視していない。つぎに「井上円了の計画」という項目を立てて、その冒頭で「このような東本願寺留学生による学校設立の構想があったが、そこから単独で井上円了が哲学館を設立するに至った経緯とはどういうものであつただろうか。」(七十六頁)と述べて、円了が単独で哲学館を設立したという説を立てている。

百年史は円了が単独で設立したという説の根拠として、二つの資料に基づいて述べている。第一はすでに述べた『資料編 I 上』(十頁)の円了自身による来歴の文章で、卒業にあたり「東京に止まり独力にて学校を開設せん志望」の「独力にて」を重視したことである。第二も、円了自身による回想で、明治四十四年六月の東本願寺の機関誌『宗報』(大遠忌号)の「宗祖大師の御遠忌に際して平素の所信を自白す」(六十七頁)と題した文章である。この中で、円了はつぎのように哲学館の創立を述べている。

「東京大学在学中、其当時の宗教界の状況を見て、悲憤慷慨に堪へざることありて、仏教の廢頽已に斯くの如きに至りたる以上は、到底一宗一派の内部にありて、其復興を謀るの無功なるを知り、宜く局外に出で、大に活動せざるべからずと思ひ、大学卒業の際、其意見を本山の当局に上申し、文書を以て再三再四往復の結果其承諾を得、是より唾手一番大に奮起し、世間に立ち、俗人となりて、専心一意、教育の事業に尽瘁し、以て仏教の

外護となりて、其頽勢を挽回せんことを誓ひ、自ら非僧非俗道人と号し独力経営によりて、哲学館を創立することに至りました」

百年史はこの二つの資料をもとに、円了の哲学館の単独での設立の説を述べている。そして、「東本願寺当局に出された文書の内容は知ることができない」（七十七頁）と述べながら、先の『宗報』の文書と『資料編 I 上』の「東京に止まり独力にて学校を開設せん志望」から、「井上円了をふくめた東本願寺留學生たちの本山へ上申した学校設立計画が、本山によりなかなか承認されず、断念せざるを得なかつたことを意味すると同時に、それを受けて井上円了が他の留學生たちと関係なく、『独力にて』学校設立計画をすすめたことを意味しているだろう」（七十七頁）と、百年史は仮説を立てている。

さらに百年史は、円了が一宗一派にとらわれない自由な活動と学校設立について、東本願寺の本山との交渉を明治二十年に入ってもおこなっていた「ようだ」といい、「ようやくにして井上円了の固い決意が本山によって承認され、還俗して学校設立の準備を進めることになったものとみられる。」（七十七頁）と推測している。ここで初めて、「還俗して」ということが明記されているが、それは円了の文章に「俗人となりて」とあつたからであらう。「還俗」の資料は明示されていないので、問題があらう。

さて、その後の円了の行動について、百年史はつぎのように述べている。「其の頃（明治一九年春）、井上円了は著述などの疲労・心労から病気に罹り、一年余熱海の湯治場で療養することになった。」（七十七頁）そこで、先に療養に来ていた加賀秀一と出会った。加賀は麟祥院で私立東京外語学校を経営していた。しかし、この学校の経営がうまくいってなかつた（4）。「円了は加賀との療養生活のなかで、旅行友達であつた棚橋一郎に語つたようなことをいい、協力を求めたのではないだろうか。」（七十八頁）円了が棚橋に語つたことは八十年史でも言及

されているが、百年史ではその原文をつぎのように引用して紹介している(5)。

「僧侶が余りにどうも地獄極楽に固り込んでしまつて居つて、本當の僧侶学をやつて居らんから如何にも残念だ、だから少し哲学思想を彼等に与へたならば、余程世の中の利益になるだらうと思ふから、斯ういうものを起さうと思ふ。君一つ賛成して呉れんか。」

円了の意見に賛意を示した加賀は、学校経営の問題を抱えていたから、「哲学の学校をそこで〔麟祥院〕やつたらどうかと勧め、井上円了は明治二〇年、熱海から帰つた後、本格的な哲学館開校の準備に取りかかつたのではないかと推測される。」(七十八頁) 百年史はこのように推測して、哲学館は東本願寺の留学生の設立する学校ではなく、円了が独りで経営する学校として設立されたと、結論づけている。

五十年史から始まつた東洋大学の歴史の編纂は、八十年史を経て、百年史で資料に基づく客観史となつて、哲学館の創立の過程はある程度明らかになつた。百年史においてすでにみてきたように、「三 哲学館創立構想」の「東本願寺留学生たちの交流」「井上円了の計画」では、創立の原点となる資料がないままに記述せざるを得ないという事情があつたから、関係資料を検討して仮説を立てるに止まつていた。本稿で紹介する円了の東本願寺への上申書を位置づけると、哲学館の創立の過程はどのように描くことになるだろうか。つぎのその上申書について述べたい。

## 五 井上円了の大学時代の手稿本と上申書(下書き)の関係

筆者が井上円了の東本願寺への上申書の下書きを見つけたのは最近のことである。すでに述べたように、この上申書については東本願寺の調査ではわからなかつたので、問題は未解決のままであつた。数年前に、円了の手稿

本・原稿などが井上円了記念学術センターに移管された。そこで、大学時代の資料をデジタル化して保存する作業に取り組んでいて、この中の一冊に、探していた上申書に相当するものがあるという確信をもった。百年史で取り上げられていた東本願寺の留學生たちの回想録とも合致するところがあつたからである。

上申書の下書きを含んだ手稿本の表紙はつぎのように書かれていた。『明治七十八年 哲四年生 井上円了 丁号 諸稿 雑稿』である。以下、この手稿本のことはその題名の一部をから取って『雑稿』と呼ぶが、『雑稿』の全体について書誌的事項を記しておこう。書型はタテ二十三センチ、ヨコ十六センチの袋綴じである。表紙は露草色で、題簽はなく、朱色で「明治七十八年 哲四年生 井上円了 丁号 諸稿 雑稿」と四行に分けて打ち付け書きされている（文末の写真参照）。本文の丁数は九十八丁、墨付本文は同数である。本文は一面十二行である。

この『雑稿』の本文は九十八丁であるが、上申書の下書きはそのうちの十一丁である。全体の一割を占める長文である。題名は「修学ノ科目并ニ将来ノ目的ニ付奉申候 愚侶輩」である。下書きは墨色で最初に書かれ、つぎに朱色で加筆訂正が行われている。翻刻にあたり、下書きに加筆訂正までなされているので、どのようにすべきか、迷つたが、巻末に原文を写真版で掲載するので、活字化するにあたっては加筆訂正を生かして読めるものとすることにした。

そのため、つぎのような方針を取った。漢字はできるだけ通行字体に改めた。判読不能の文字は□で表した。原文に句読点はなかったが、読みやすさを考えて筆者が加えた。原文にはほとんど改行はなかったので、適宜に一字下げの改行を行った。また、長文の挿入文が朱色で二ヶ所あり、(a)(b)の符合がつけられていたが、これは指定のところで読み込んで、(a)(b)の符合は省略した。このうちの(b)は欄外に朱色で書かれていた

が、その以外の欄外に墨色で書かれた文章は、上申書の下書きとは無関係であるので注意されたい。このような方針で、上申書の下書きを翻刻すると、つぎのようになった(6)。

## 六 明治十七年秋、井上円了の東本願寺への上申書(下書き)

修学ノ科目并ニ将来ノ目的ニ付奉<sup>レ</sup>上申候 愚侶輩

先年東京留学ノ命ヲ奉シ、先後年ヲ追テ東上シ、或ハ大学予備門ニ入校シ、或ハ同人社或ハ慶応義塾ニ入学シ、各人其課程ニツイテ普通ノ学科ヲ研修シ、歲月移ルニ從ヒ定規ノ試験ヲ經テ上級ニ漸進シ、已ニ予備門ヲ卒業シテ大学本科ニ就クモノアリ、又私塾ヲ卒業シテ大学撰科ニ修スルモノアリ。当時ハ愚輩六人皆東京大学ニ在学スルヲ以テ、爰其各今日修ムル所ノ科目、将来期スル所ノ目的ヲ開陳シテ、賢明ノ裁可ヲ仰ク所ナリ。

伏シテ惟ウルニ、僧侶ノ教祖ニ対シ本山ニ答フルノ義務、布教伝道ノ目的ヲ達スルニ外ナラス。其目的ヲ達スルニ二種ノ方法アリ。一ハ實際ニシテ、一ハ理論ナリ。スヘテ学問上ノ研究ハ此理論ニ属ス。理論ニ又二途ノ方法アリ。一ハ自教ノ性質ヲ研修スルニ止マリ、一ハ自他ノ關係ヲ論究スルヲ主トス。此二者ハ多少学問ノ性質ヲ異ニスルヲ以テ、一人ノ力能ク之ヲ兼ヌヘキニアラス。是ニ於テ分業ノ学制ヲ設ケサルヘカラス。今此二学問ノ異ナル所以并ニ其二者ノ觀<sup>カ</sup>ノ異ナル所以ヲ略定<sup>カ</sup>セン。

先ツ之ヲ人身ニ譬フ。飲食ハ其体内ヲ養フヲ以テ、自教ノ性質ヲ研修スルカ如ク、衣服居室ハ其体外ヲ護スルヲ以テ、自他ノ關係ヲ論究スルカ如シ。一身ノ健康ハ衣食住三者ニ適宜ヲ得ルト得サルトニ属スルヲ以テ、宗教ノ盛衰ハ内外二途ノ方法ノ權衡ヲ得ルト得サルトニアルヘシ。又之ヲ兵制ニタトフ。一ハ陸軍ノ内乱ヲ鎮スルカ如ク、一ハ海軍ノ外寇ヲ防クカ如シ。二者其一ヲ欠クモ独立維持ヲ全フスヘカラス。スヘテ万事千歳一トシテ内

外ノ組織其宜ヲ得スシテ成功スヘキモノナシ。

今更ニ政府ノ組織ニツイテ其理ヲ明カニセン。自教ノ性質ヲ研修スルハ内務省ノ事務ノ如シ、自他ノ關係ヲ論究スルハ外務省ノ事務ノ如シ。往昔鎖港ノ時ニ当テハ独リカヲ内務ノ事業ニ尽シテ足レリト雖モ、万国交際ノ今日ニ至テハ外務ノ設アルニアラスレハ、国家ヲ維持スル能ハス。交際愈々密ニ通商愈々繁ナルニ從ヒ、益々外務ノ事業ヲ興セサルベカラス。

今教法ノ獨立ヲ護持スルモ亦然リ。昔日他教諸学未タ□ケサルニ当リテハ、内務ノ事業即チ自教ヲ研修スルヲ以テ足レリトス「ト」雖モ、今日他教諸学ノ陸續我邦ニ入り、我教法ノ藩籬ニ逼ルニ当リテハ、其間ニ立チテ自他ノ關係ヲ論究スル所謂外務ノ事業ヲ起サ、ルヘカラス。尔後其關係愈々密ニ赴クハ必然ニシテ、外務ノ事業ヲ盛ニスル日一日ヨリ急ナルハ明ナリ。

我本山ノ賢明早ク已ニ此ニ注目アルアリテ、曩ニ育英教校設立シテ其生徒ニ内外ノ両学兼修セシメ、又教師教校内ニ英仏両学科ヲ設ケテ之ヲ教授セシム。是レ即チ学問ニ内外ノ両組織ヲ設ケ、分業ノ学制ヲ構成シタルモノト謂フヘシ。然ルニ時移リ人換リ学制又從フテ変革シ、諸教校中一トシテ西洋学ヲ講究セシ□ハナキニ至ル。幸ニ不肖ノ愚侶輩ノ之ヲ承ケテ東京留學生ニ加ハリ、泰西ノ諸学ヲ専修スルノ特認特命ヲ得タリ。時ニ以為ラク、是レ本山固ヨリ外務ノ学制ヲ起スノ旧謀再興セルヲ尋クモノナリト。愚輩菲才浅学此ノ如キノ大任ニ捷ツトノ力ナシ。其心亦竊ニ喜フ所アリテ、本山ノ学ヲ思ヒ人ヲ愛スルノ至レルニ感銘セサルハナシ。

尔来専心一志微力孜々トシテ早く重任ヲ全フセンコトヲ期シ、小心翼々トシテ、或ハ長途ノ致スヘカラサランコトヲ恐ル。歲月荏苒以テ今日ニ至ル。顧テ教海ノ風潮ヲ觀察スルニ、耶蘇教ノ盛ナル日一日ヨリ甚シク、諸学諸想ノ進歩発達又昔日ノ比ニアラス。外務ノ關係実ニ多忙ナリト謂フヘシ。然ルニ其途ニ当ラントスルモノ、

僅々愚輩ノ六名ニ過キスシテ、其他ハ皆内務ノ事業ニ従フモノナリ。而シテ又愚輩ノ修ムル所未タ□□ヲ奏セサルヲ以テ、今日外務ノ要路ニ就ク能ハス、遺憾モ亦甚シ。然レトモ愚輩ノ成業多日アルニアラス。是ヨリ年ヲ追テ、早晚皆其途ニ就クコトヲ得ルヤ、□□ヲシテ□□□□、タトヒ其重任ヲ負フモノ愚輩六名ニ過キスト雖モ、其中互ニ協力分勞シテ各其一事ニ努力スレハ、又一時ノ危難ヲ防クニ足ル。今其外務ニ属スル事業ヲ挙クレハ左ノ如シ。

第一ニ 宗教総体ノ性質

第二ニ 宗教ト道德トノ區別

第三ニ 宗教ト理学哲学トノ異同

第四ニ 宗教ト政治法律トノ異同

第五ニ 仏教ト理学哲学トノ關係

第六ニ 仏教ト政治法律トノ關係

第七ニ 仏教ト耶蘇教トノ關係

第八ニ 仏教ト日本現今社会トノ關係

此八条ハ、今日教育家ノ一組織ヲ構成スルニ欠クヘカラサルモノニシテ、我カ宗門中未タ其設ケナシ。仏教ニ志アルモノ誰レカ其欠点一日モ慨セサルモノ□□□□、タトヒ能仏徒タルモノ□□□□独リ自教ノ性質ヲ研究スルモ、他教諸学ノ關係ヲ論究セサレハ、教法今日ノ興隆ヲ期スヘカラサルハ、先ニ論スル所ヲ以テ已「二」明カナリト信ス。愚輩不肖先見ノ明ナシト雖モ、聊カ此ニ思フ所アリ。□□微力ヲ以固ヨリ本山ノ□□恩ノ万一二報スヘシトス。

是愚輩ノ西洋諸学ヲ研究スル所以ナリ。抑々西洋学ハ数科ノ学問ニ分ル。之ヲ大別スレハ、理学哲学ノ二部トナル。理学ニハ物理化学天文地質生物学等ノ諸科アリ。哲学ニモ純正哲学心理学倫理学政治学論理学等ノ諸科アリ。純正哲学中又之ヲ細分スレハ

哲学館 仏教館

1 東京大学文学部哲学本科第四年級

井上円了

明治十八年六月卒業

右目的

4 東京大学文学部哲学本科第二年級

徳永満之

明治二十年六月卒業

2 東京大学理学部物理学撰科第二年級

今川覚神

明治二十年六月卒業

3 東京大学文学部哲学撰科第二年級

柳 祐信

明治二十年六月卒業

5 東京大学予備門第一級生

沢辺昌麿

明治二十二年卒業

明治二十三年卒業

柳 祐久

古代近世ノ二種アリ、日耳曼英國ノ二派アリ、今總シテ宗教別シテ仏教ニ關係ヲ有スルモノハ、哲学ノ諸科ト  
理学中物理生物ノ諸科ナリ。而シテ哲学中其最モ密切ナル關係ヲ有スルモノハ純正哲学ナリ。

之ヲ仏教ヲ配スルニ、其所謂実体哲学ハ小乘諸派ニ類シ、心理哲学ハ大乘唯識ニ類シ、論理哲学ハ天台ニ類  
ス、或ハ俱舍ハ其所謂唯物論ニシテ、法相ハ唯心論、天台ハ物心二元一体論ニ同シ、或ハ又英國哲学ハ心理学ヲ  
本トスルヲ以テ俱舍唯識ノ比スヘク、独逸哲学ハ論理ヲ本トスルヲ以テシ華嚴天台ニ比スヘシ。

是ニ由リテ之ヲ觀レハ、西洋哲学數百年來研究スル所ノ真理、仏一代五十年間所説ノ法門ノ外ニ出ツル能ハ  
ス。又西洋諸学今日論決スル所諸説、尽ク千年以前ニ存スルヲ見レハ、誰レカ积尊ノ活眼卓識セ□人ノ意外ニ出  
ツルヲ嘆セサルモノアラン。東洋古学ヲ再興シテ独リ西洋□□学□ニアラシ、豈之ヲ野蠻視愚法ナリトシテ廢棄  
スルノ理アルヤ。

然トモ世上ノ学者、彼ヲ学フモノ我ヲ知ラス、我ヲ学フモノ彼ヲ知ラス。ツイニ我教ノ真理ヲシテ、世人ノ間  
ニ其光ヲ放タサラン□□ニ至ル憾モ亦甚シ。仏教ニ志アルモノ蓋慨然トシテ憤起セサルヘ□□□。是レ愚輩□□  
哲学ヲ修ムル所以ニシテ、早ク此説ヲシテ西洋ノ説ニ比考シ、其真理ヲシテ理学哲学ノ上ニ輝カシメント欲ス。

唯、恨ムラクハ世人一般ニ、仏教ヲ目シテ愚夫愚婦ノ法ナリ、虚無空寂ノ教ナリト云ヒ、或ハ其説ク所、須弥  
ノ妄誕ニ過キス、三世ノ空理ニ止マルモノト見做シ、更ニ一人ノ其教中西洋今日諸説ニ一步ヲ譲ラサル真理ノ胚

胎スルヲ知ルモノナシ。此ノ如キ世人ノ惑ヲ解キ疑ヲ開クノ良策□□ハ西洋諸説ヲ論究シテ、其真理ト比考スルニ如カス。斯クシテ其真理ヲ世間ニ明ニスルニ於テハ、学者社会ノ景況ヲ一変スヘキハ愚輩ノ信シテ疑ハサル所、果シテ然ラハ仏者中哲学ヲ修ムルハ今日ノ急務ナリト謂フヘシ。

次ニ仏教ノ大ニ恐ルヘキハ、理学ノ実験説ニシテ、既ニ須弥説ハ地球論ノ廃スル所トナリ、心性不滅論ハ唯物進化説ノ破ル所トナル。其他天堂地獄ノ説、三世□□ノ説、西方浄土ノ説、皆実験ノ其妄誕ヲ証明スル所ナリ。若シ果シテ其証明スル所ヲシテ真ナラシメハ、仏教何レノ地ニカ其論ヲ立テン、何レノ時ニカ其説ヲ伝ヘン。仏徒タルモノ焉ソ其言ヲ聞テ甘受スヘケンヤ、其証ヲ見テ黙止スヘケンヤ。夙夜孳々トシテ、之レニ答ヘンコトヲ思ハサルヘカラス。

是レ愚輩ノ愛ニ理学ヲ修ムルヲ以テ仏者ノ急務トナス所以ナリ。即チ物理学中物理学ハ其主タルモノナルヲ以テ、之ニ就テ万物ノ性質万象ノ変化、大ハ宇宙全体ノ組織ヨリ、小ハ分子離合ノ作用ニ至ルマテヲ研修シ、其説ノ仏説ニ応合適用スルノ如何ヲ思考スヘク、生物学ハ近世其影響ヲ大ニ諸学ニ及スヲ以テ、之ニ就テ生物ノ原始心身ノ関係靈魂ノ生滅ヲ講究シ、併テ唯物進化ノ原理ヲ、及其耶穌教創造説トノ関係ニ論究、仏説ヲシテ其説ニ調和セシムルノ如何ヲ思念スヘシ。是レ又愚輩ノ理学中主トシテ物理生物両学ヲ講究セント欲スル所以ナリ。

次ニ仏教ノ敵視スヘキモノハ耶穌教ニシテ二者トハ其盛衰利害ヲ異ニスルヲ以テ、我ト彼ト同時ニ盛シナルコト能サルノ勢アリ。彼レノ信スル所ヲ排キ、彼ノ論スル所ヲ破ラスレハ、当時ノ勢到底我教ノ□□スヘキナシ。若シ其立ル所ヲ論破セント欲セハ、其教ノ原理ヲ究索セサルヘカラス。然ルニ仏者ノ耶穌教ヲ駁スル、大抵其原理ヲ知リテ駁スルニアラス。唯、枝葉ノ末説ニツイテ論スルノミ。是レ真ニ耶穌教ヲ駁スルモノト謂フヘカラス。故ニ今日ノ急務ハ又耶穌教ノ極理ヲ搜索スルニアリ。愚輩ノ西洋学ヲ研究スルハ旁ラ其極理ヲ探ル「ナ」リ。

仏教ト如何相関スルカヲ知ラントスルニアリ。然リ而シテ耶蘇教ト盛衰ヲ争ヒ實際ニ布教伝道セント欲セバ、先ツ社会ノ事情政治ノ関係道德ノ区域ヲ討究セサルヘカラス。是レ愚輩併セテ社会学道德学ヲ研修セント欲スル所以ナリ。

之ヲ要スルニ仏者今日ノ急務ハ、第一ニ西洋哲学諸科ヲ研究シテ、仏教ノ諸説ニ応合スルニアリ。第二ニ物理生物諸学ヲ講習シテ、仏説ト理学トノ争論ヲ調和スルニアリ。第三ニ耶蘇教ノ極理ヲ論破シテ、仏教ノ真理ヲ開示スルニアリ。第四ニ政治道德ノ性質社会ノ事情ヲ搜索シテ、實際ノ布教ヲ思考スルニアリ。是レ愚侶輩ノ所謂外務ノ事業ニ属スルモノニシテ、不肖ノ六人六勞ヲ分チカヲ協セテ其任ニ当ラントスル所ナリ。故ニ其今日修ムル所各其科ヲ異ニシ、大学在学中ハ、或ハ哲学ヲ専攻スルモノアリ、或ハ理学ヲ兼修スルモノアリ。他日卒業ノ後ハ、其科ニ相応シタル仏学ヲ講習シ、終生力ヲ窮メテ、今日定ムル所ノ目的ヲ達センコトヲ期スルナリ。今爰ニ其今日修学スル所及ヒ他日卒業后兼修セント欲スルノ事業目的ヲ開陳スル、左ノ如シ。

(第一) 右ハ在学中哲学諸科別シテ純正哲学日耳曼哲学ヲ講究シ、傍ラ宗教ノ原理ヲ。卒業后仏教全体、別シテ華嚴天台ノ法門ヲ修学シ傍ラ宗教ノ原理ヲ

(第二) 右ハ在学中哲学諸科、別シテ英国哲学心理哲学ヲ講究シ、卒業后俱舎唯識ヲ兼学セントス、傍ラ耶蘇教ノ原理ヲ搜索シテ

(第三) 右ハ在学中物理学ヲ専修シ、傍ラ天文学化学等ヲ講究シ、卒業后之レニ関係ヲ有スル仏教中ノ諸点ヲ搜索シ、及ヒ仏学理学ト耶蘇教三者トノ関係ヲ証明セントス

(第四) 右ハ在学中哲学諸科、別シテ倫理政理史論等ノ諸学ヲ研修シ、卒業后宗余両乘別シテ宗乘ヲ兼修シテ宗教ト社会トノ関係ヲ証明セントス

(第五) 右ハ在学中生物学ヲ専修シ心身進化ノ理ヲ論究シ、卒業后仏教及ヒ進化学ト耶蘇教ノ關係并ニ理学ト  
仏学ノ關係ヲ証明セントス

(第六) 右ハ在学中和漢文学ヲ研修シ、併セテ希臘哲学東洋哲学ヲ講究シ、卒業后儒仏両道全体ヲ兼学シテ東  
西両洋ノ哲学ヲ比考シ、印度哲学ト諸哲学トノ異同ヲ弁明セントス

以上列記スルカ如ク専修兼学ノ学科ヲ在学中ト卒業后ノ二期ニ分チ、終身其定ムル所ノ学ニ従事セント欲スル  
ハ、愚侶輩ノ今日口ニ誓ヒ心ニ約スル所ナリ。愚輩微弱固ヨリ□□□□雖モ愚輩亦一片ノ丹心ヲ有ス。此丹心能  
ク、千辛万苦亦心ヲ尽シテ此考□鳴□本山アリテ茲ニ此身アリ、此身アリテ此心アリ、豈敢テ本山ノ為メニ此ヲ  
ナサ、ルヘカランヤ。是レ力微弱ヲ以テ外務ノ重任ヲ負ヒ外寇ノ衝路ニ当リ法城ヲ千死一生ノ間護持スヘシト誓  
ヒハ是愚輩ノ本山ニ対スルノ微衷ナリ。唯此一片ノ丹心ヲ以テ山恩ニ報答スル。

他日六人尽ク卒業スルノ日ニ至ラハ、一堂ニ相会シテ互ニ推敲討論スルコトヲ要スルヲ以テ、願クハ仏教哲学  
ノ両館ヲ輦轂ノ下ニ創設アランコトヲ。其時ニ当テハ僧侶中内外ノ学ヲ修ムルモノ尽ク此館ニ会シ、教理ヲ問答  
討究シテ、僧俗学問ノ中心日本教海ノ標準トナランコトヲ冀望ス。

而シテ自教ノ性質ヲ研修スル所謂内務ノ事業、本山已ニ其人ニ乏シカラス。実宗ノ法務ヲ営ムベキ世間亦其人  
多ハ任スル。請フ愚輩ヲシテ独リ未タ之ヲ修ムルモノナキ所謂外務ノ事業ニ当ラシメンコトヲ。唯此ニ冀望スル  
所、本山在学中ハ從來ノ如ク留学生ノ学資ヲ給与アリシコトヲ修学ノ進路ニ妨ナキノアランコトヲ。愚侶輩篤才  
猶ホ能ク積日千里ヲ致スヘシト雖モ、学資ノ一点ニ至リテハ千□万□ストモ自弁ノ方ナキヲ以テ、而シテ学問ノ  
奏統ハ学資ノ給ト不給トニ属スルヲ以テ、是レ本山ニ向フテ其恩ヲ仰カサルヘカラス。

伏シテ冀クハ学問ノ廢続ハ学資ノ給ト不給トニ属スルヲ以テ在学中ハ從來ノ如ク学資ヲ続与アリテ中道ニシテ其業ヲ廢スルニ至ラザランコトヲ。愚輩驚才猶ホ能ク積日千里ヲ致スヘシト雖モ、学資ノ一点ニ至リテハ千思万考スルモ資力ノ自弁スヘキニアラス。是レ本山ニ向フテ其余恩ヲ仰カサルヘカラサル所ナリ。

而シテ学業ノ進ムト進マサルトハ、愚輩ノ責ニ任スル所ヲ以テ、請フ、本山之ヲ進退セヨ、他日幸ニ六人尽ク卒業スルノ日ニ至ラハ、一堂ノ下ニ相会シテ多年蛩雪ノ間ニ学ヒ得タル結果ヲ集メテ互ニ相推敲討問スル所アルヘシ。敢テ願クハ仏教哲学ノ兩館ヲ輦轂ノ下ニ創設アリテ、旧時ノ僧侶中内外ノ学ヲ兼修スルモノ尽ク此館ニ相会シ、宗教ノ真理ヲ講究シテ、外ハ耶穌教諸学ニ対シテ其駁撃ヲ防キ、内ハ仏者僧侶世俗ニ対シテ其奉信ヲ起シ、即チ此館ヲ以テ僧侶学ノ中心日本教海ノ標準トナサンコトヲ。是レ未タ仏教中他宗他派ノ着手セサル所ニシテ、我宗独リ此外務開館ノ設アルニ至ラハ、又我本山ノ榮ナリ。

而シテ自教ノ性質ヲ研修スル所謂内務ノ事業ハ、本山已ニ其人ニ乏シカラス。實際ノ法務ヲ営ムモノ世間亦其人多シ。請フ愚侶輩ヲシテ独リ其未タ研修スルモノナキ所謂外務ノ事業ニ従ハシメンコトヲ。聊カ微衷ヲ開陳シテ、爰ニ數ク其修学ノ宜ヲ得ルト得サルト目的ト当ヲ失スルト失セサルトハ唯、英明之ヲ取捨セヨ。右六人瞻仰上奉上申候。

## 七 上申書(下書き)の概要

この上申書は、すでに見たとおり、七千字を超える長文である。文章としては下書きであるから、段落の途中

で切れているところがあり、また重複しているところがあるが、これを元にして清書したものと考えられる。

この下書きにあるように、当時、東本願寺の東京留学生は六名いた。井上円了、徳永（清沢）満之、今川覚神、柳祐信、沢辺（稲葉）昌麿（昌丸）、柳祐久で、全員が東京大学に在学していた。円了はこの六名のうち、本山が指名したリーダーであり、留学生の第一号であり、卒業時期が一番早かったので、六名の代表者として、近況を報告しながら、自分たちの将来の目的を、派遣元である本山（東本願寺）へ上申したのである。この長文の上申書の下書きについて、その大要をまとめると、つぎようになるだろう。まず、円了は僧侶の義務から説明する。

教祖や本山に対する僧侶の義務は、布教伝道の目的を達することにあるが、その方法は実際と理論の二種があり、その内の理論には、自教の性質を研修することと、自他の関係の論究を主とすることの二途がある。この二者は学問の性質を異にするので、一人で兼任することに無理があり、分業の学制を設けなければならない。

こうして、円了は二種の学問の関係について例を引いて説明する。その一つが政府の組織を取り上げたものである。

政府の組織をみると、自教の性質を研修するのが内務省であり、自他の関係を論究するは外務省にあたる。鎖国時代には内務の事業のみでよかったが、万国交際の今日は、外務を設けなければ、国家を維持できなくなつた。交際や通商が盛んになり、外務の事業を拡大しなければならなくなつた。このことは、現在の教法の独立を護持することにも通じる。かつては内務の事業、すなわち自教の研修で事足りたが、現在のように他教・諸学が盛んに我国に入ってきて、我が教法に迫ってきている状況では、自他の関係を論究するという外務の事業を起さなければならず、その外務の事業を盛んにすることは緊急を要するものである。

しかし、教団の学制はかつて内外の学を兼修させていたが、それも変わり、西洋学を講究するところが現在はなく、われわれ留学生のみが西洋の諸学を専修する特命を受けている。この留学は今後、教団が外務の学制を再興させるものと考えられる、と円了は述べている。そして、キリスト教の隆盛、諸学・諸想の進歩発展は急速な現状では、六名の留学生が協力して分勞すれば、一時の危難を防ぐこともできるという。円了のいう外務の事業とは、宗教と仏教を二つに分けて、つぎのように捉えられている。

第一に「宗教総体の性質」、第二から第四は宗教との関係で、「宗教と道徳との區別」「宗教と理学哲学との異同」「宗教と政治哲学との異同」である。つぎの第五から第八は仏教との関係で、「仏教と理学哲学との関係」「仏教と政治法律との関係」「仏教と耶蘇教との関係」「仏教と日本現今社会との関係」である。こういう研究は今の教団にはない。自教の性質の研究は行うが、他教・諸学の論究をしなければ、教法を今日に興隆することは期待できないことは、さきに論じたところである。

このように主張する円了は、西洋学とは何かを説明している。西洋学を大別すると、理学と哲学の二部となる。理学には物理、化学、天文、地理、生物学などがあり、哲学には純正哲学、心理学、倫理学、政治学、論理学などがある。

円了はこのつぎに「純正哲学中又之ヲ細分スレハ」と書いてから、これと関係なしに「哲学館 仏教館」と記し、つぎに六人の留學生の在学（学校と学年）、卒業年次を列記している。それを書き終えてから、また「純正哲学中又之ヲ細分スレハ」の文章を書き続け、仏教と関係する学問として、哲学の諸科と理学のうち物理学と生物学の諸科を取り上げて、それに耶蘇教の極理の研究を加えて、仏教との関係をそれぞれ具体的に概説している。

そして、仏者の今日の急務として、これらの概説をつぎのように要約している。第一に西洋哲学の諸科を研究して、仏教の諸説との応合を明らかにすること。第二に物理学・生物学を講習して、仏説と理学との争論を調和すること。第三に耶蘇教の極理を論破して、仏教の真理を開示すること。第四に政治・道德の性質、社会の事情を捜索して、実際の布教を思考すること。これがいわゆる外務の事業に属するものである。

これを留学生の専攻と勘案して、それぞれの担当すべきものを、円了は書いている。これらは「愚侶輩ノ今日口ニ誓ヒ心ニ約スル所ナリ」という。他日、留学生の六人が卒業する時にあたり、一堂が相会してお互いに研究・討論することが必要であり、仏教・哲学の両館を社会のもとに創設することをお願いしたい。旧事の僧侶で内外の学を兼修する者をこの館に集め、宗教の真理を講究し、外には耶蘇教や諸学に対しその駁撃を防ぎ、内には僧侶が世俗に対して奉信することを起したい。そして、仏教館、哲学館の両館をもって、僧侶学の中心とし、日本教海の標準としたい。この事業は未だ他宗他派の着手していないことであり、我が宗が独りこの外務の開館の創設に至れば、我が本山の名誉となるでしょう。

このように仏教館・哲学館の創立の必要性を述べた円了は、最後に学問の廢続は学資の給・不給に関わることであり、在学中は従来のように学資の続与をお願いしたいと付記している。

円了の上申書は、時代の先を見通した、いわゆる「近代化」への道を示していて、教団の将来に不可欠ものを提案していたことがわかる。しかし、当時の教団の上層部はこの意味をすぐに受け止める状況になかったと考えられる。そのため、円了と教団との間で、再三再四の交渉を繰り返すことになった。

## 八 上申書と哲学館の創立の過程について

これまで見てきたように、円了が東本願寺へ上申した文書は、哲学館の創立の原点であった。その決意を表したのが何時なのか、上申書の下書きには日付が書き込まれていない。しかし、それを推測することは可能である。上申書の下書きされた先の『雑稿』が手がかりとなるからである。

『雑稿』には、のちに『真理金針 初編』として単行本となった論文の下書きが初めにあり、つぎが上申書、その次が文学会の文書、そして再び『真理金針 初編』の論文という順序で書かれている。『真理金針 初編』の初出は、仏教系新聞『明教新誌』に「余が疑団何の日にか解けん」「耶蘇教を排するは理論にあるか」のタイトルで掲載されたものである。『雑稿』には、論文の始めの二回分が下書きされている。この二回分が掲載された年月日は、明治十七年十月十六日（一七四九号）と同年十月二十四日（一七五三号）である。そして、上申書、文学会関係と進み、つぎが第三回分の「耶蘇教を排するは理論にあるか」で、これが掲載されたのは、同年十月三十日（一七五六号）である。

百年史の記述では、「一八年の春、東本願寺の留学生たちは……この協議の結果を書面で本山に上申したという」（七十六頁）となっているが、これは訂正が必要であろう。『雑稿』から推測できる上申書の時期は、既述のように「明治十七年秋」である。円了が大学四年生になって間もない頃である。したがって、哲学館の創立の「原点」は、明治十七年秋の円了の東本願寺への上申書にあったと考えられる。

このように考えると、恩師の石黒忠憲の証言と符合する。石黒の文部省への就職斡旋を、円了は自ら東本願寺の給費生であり、また将来に宗教的教育的な事業を行いたいという理由で固辞していたからである。このときすでに、円了は東本願寺へこの上申書を提出していたのであろう。

学校設立に関する本山との交渉は再三再四にわたった、と円了は述べている。教団にとって、教理、教学、学事という事項は最重要のもので、円了の上申に対して、伝統のある東本願寺（真宗大谷派）の本山の検討や決定が容易にすまなかったことは、教団の近代史<sup>7</sup>から予想できる。

百年史の「このような東本願寺留学生による学校設立の構想があったが、そこから単独で井上円了が哲学館を設立するに至った経緯とはどういうものであっただろうか。」（七十六頁）という記述は問題を含んでいる。

円了が単独で設立するために、百年史は「還俗」したと判断している。ところが、筆者が本山の宗務所に依頼して、戸籍にあたる「寺籍簿」を調査した結果、円了は明治四年四月二日に得度したという記載以外にない。除籍の事実がないのである。また「還俗」の問題は現実的に容易なものではなかった。円了は慈光寺の次期住職の候補者であり、本山の給費生として教団所属の身分<sup>8</sup>があった。「還俗」は個人的に解決するには大き過ぎる問題であった。百年史は、学校設立にあたり、円了が「独力で」取り組んだことと、「還俗して自由になる」ことを誤認していると考えられる。本山の機関誌をみると、円了の教団における身分は大学卒業後もしばらくは変わっていない。

では、どのようにして、円了は哲学館の創立の構想を固めたのであろうか。本山と交渉をする過程で、関係者と協議していたことは、百年史にも書かれているとおりである。その他に、「井上氏は既に加藤弘之博士と相談して哲学館の創立に骨折つてゐた」<sup>9</sup>ことがあるので、円了が「哲学館の三恩人」とよぶ「加藤弘之」や真宗大谷派の真浄寺の住職「寺田福寿」などの協力を得て、「独力で」構想作りに取り組んだものと考えられる。こうして、上申書にある構想は、明治二十年の「哲学館開設ノ旨趣」に発展したのだろう。

さて、円了が上申書を提出して教団の本山と長い交渉を行ったと、自ら述べているが、大学卒業が明治十八年

であり、哲学館の創立まで二年間の時間がかかっている。円了は大学卒業後、選ばれて官費給費生となり、東京大学の研究生、帝国大学の大学院生となつて、本山からは「印度哲学取調掛」を命ぜられている。この間に、『明教新誌』にのちに『真理金針』となる三部作の論文と、雑誌に『哲学要領』の論文を長期間にわたり執筆している。教団とのしがらみを持ちながら、なぜ、哲学館が明治二十年に創立できたのであろうか。また、哲学館と東本願寺の留学生の関係は完全に切れた状況だったのであろうか。

筆者はつぎのように推測する。明治二十年は、円了について、二人の留学生（徳永満之、柳祐信）が大学を卒業した時期である。これを待つて、円了は哲学館の創立に踏み切つたのではないか。もちろん、哲学館は東本願寺の留学生だけで教育体制が作られたものではない。しかし、たとえ円了が独力で哲学館の設立に取り組んだとしても、身分は教団所属であつた。そこで、本山の認知を得るために、留学生が加わる必要があつたのである。二人の留学生の卒業のタイミングに合わせて、哲学館の創立に踏み切つたのではないか。

「井上円了をふくめた東本願寺留学生たちの本山へ上申した学校設立計画が、本山によりなかなか承認されず、断念せざるを得なかつたことを意味すると同時に、それを受けて井上円了が他の留学生たちと関係なく、『独力にて』学校設立計画をすすめたこと意味しているだろう」（七十七頁）という、百年史の仮説は問題があるだろう。例えば、明治二十年七月二十二日に東京府知事に提出された「私立学校設置願」（『資料編 Ⅰ上』、八十四〜八十六頁）をみると、教員は二人のみで、円了は館主兼教員、もう一人の教員は留学生の徳永満之である。この構成で私立哲学館の設置願いを提出している。また、明治二十一年一月の哲学館の第一年度科目と講師（『資料編 Ⅰ下』、三頁）をみると、円了と徳永満之はそれぞれ授業を担当しているが、評議員は四名いて、そのうちの二名は大学を卒業したばかりの徳永満之、柳祐信という東本願寺の留学生が就任している。このような資

料から考えると、哲学館の創立の過程と東本願寺の留学生の関係はまだ続いていたといえる。それ故に、本山の機関誌『本山報告』の明治二十年八月十五日（第二十六号）に、「○本局用掛（文学士）井上円了は、今般専門の諸学士に謀り、哲学専修の一館を創立し……仮教場を東京本郷龍岡町三十一番地に設け、九月十六日より開業する旨届けたり」と公表されるまでに至ったのである。

誤解のないように言えば、哲学館は東本願寺の教団の営為として創立されたものではない。「哲学館ハ二百八十人ニヨリテ設立シタルモノ」（『通史編 Ⅰ』、百二十二頁）で、七百八十円の寄付が基金であったと、円了が言うように、資金と人材の両面で関係者の協力を得て、円了の「独力で」創立したものである。しかし、円了と東本願寺の教団との関係は創立後も続いていた。晩年に書いた円了の来歴の文章<sup>2</sup>には、哲学館の設立をめぐり、「再三再四問答往復の結果、漸く本山の承諾を得るに至りたり」といい、つぎに「是に於て最初無意識に受けたりし得度は、自然に本山に委託返上したる姿になり、身は全く俗物と化し去れり、然れども余の宗教的信仰は依然として真宗を奉じ、終始を一貫して替ることなし」と書かれている。

円了は「還俗」をしなかったが、「得度は、自然に本山に委託返上したる姿になり」という結果になったという。「自然に」そうになったのは、哲学館の創立の翌年、つまり明治二十一年六月に徳永満之を始めとする、円了以外の東本願寺の留学生たちが、教団が京都府から経営を委託された京都府尋常中学校の教員となるために京都の本山に帰山して、哲学館は円了が独力経営せざるを得なくなったからであろう<sup>10</sup>。

本稿では、明治十七年秋の円了の東本願寺への上申書（下書き）を、哲学館の創立の原点として紹介した。この下書きは、近代の哲学、仏教などに関する円了の思想を述べているものであり、その分野でも関心をもたれる資料であろう。なお、この上申書に続く、円了と本山との交渉過程を明らかにする資料はいまのところわかって

いない。このことが今後の課題として残っていることを記しておきたい。

【註】

- (1) 石黒忠恵「感想」(井上円了先生)東洋大学校友会、大正八年)八十六頁。
- (2) 『資料編 I上』(九〇十頁)に「自述来歴」のタイトルで収録されたものは、井上円了「第一篇 信仰告白に関して来歴の一端を述ぶ」(『活仏教』付録、丙午出版社、大正元年)である。この文章は『井上円了選集』の第四卷(東洋大学、一九九〇年)に『活仏教』として同じく全文が収録されているが、本稿では『資料編 I上』を用いることにする。
- (3) 『清沢満之全集』第一卷、法蔵館、昭和二十八年、五百八十八頁。
- (4) 西村見暁『清沢満之先生』法蔵館、昭和二十六年、八十六〜八十七頁。ここには、西村が加賀秀一から直接聞いた、麟祥院で哲学館が創立されるまでの話が記述されている。
- (5) 『思想と文学』第二卷第三冊、昭和十一年十一月、六十九頁。
- (6) 翻刻にあたり、吉岡又司氏(新潟県長岡市の越路円了会会長)のご指導をいただいた。記して謝意を呈します。
- (7) 寺川俊昭『念仏の僧伽を求めて―近代における真宗大谷派の教団と教学の歩み』法蔵館、二〇〇一年(新装版)参照。
- (8) 東本願寺の機関誌『本山報告』では、「本局用掛文学士井上円了」と記されている。大谷大学の木場明志教授のご教示によれば、「本局用掛」とは、東本願寺寺務所の職制改正によってできた職名であり、本局とは教務部・学務部・庶務部・地方部・財務部を所轄する部門である。円了は学務部の一員であったと考えられる。
- (9) 佐治實然「井上先生」(前掲書『井上円了先生』七十三頁)。
- (10) この経過については、拙稿「井上円了『世界旅行記』補遺―第一回欧米視察の旅行日録」の六(『井上円了センター年報』第十四号)六十六〜七十頁参照。

丁号

新稿

諸稿

西暦一九〇五年  
一月一日  
至  
一月三十一日

中  
五  
五  
五





研修之見しハ  
 研修ノ愛  
 人ニ至ラズ  
 上ニ至リテ  
 神ヲマテ  
 見レバ當ニ  
 是レハ至ス  
 我ヨリ修マ  
 研修ノ見  
 此ノ見  
 乃リ或ハ  
 權ヲシテ  
 ハ修マズ  
 ルニ故ニ  
 以上ノ諸者  
 一ニ見テ  
 全局ヲ

研修之ニ止ミリハ自他ノ廣係ヲ淨光スルニ在リ此二者  
 心ヲ内ノ世内ヲ異ニスル一人ノ力能ク之兼ヌキニアラス  
 是ニ於テ分業ノ學制ヲ設ケテカラス今此二字内ノ異  
 人ノ修業ノ際先ツテ政者ノ理據ニ老クハ自教ノ  
 性質ヲ研修スル内務者ノ事務ノ如シ自他ノ廣係ヲ  
 淨光スル外務者ノ事務ノ如シ者ニ銘港ノ時ニ當テハ  
 内務ノ事務ノ事業ヲ尽シテ是レキリ能ク人ノ萬國交際ノ  
 際ニ至テハ外務ノ設ケルニ至スルハ固チ修テ能ク持テ能ク又  
 其際愈ク密ニ通商者ノ業トシテ之ニ從ヒ益ク外務ノ事業  
 ヲ修メテハ今修業ノ獨立ヲ設テスルニ亦然ナリ  
 若ク他教諸字未ダ修メテニ在リテハ自他ノ事務ノ事業  
 即チ自教ヲ研修スルヲ以テ足レバ能ク今日他教諸字



不本原二

信笑ノ後リ

所唯後ノ

立アノ後

又久ノ後

元所也

瑞中地

洋中

之三四等

致之六回

有之六回

是之六回

能之六回

子ノ六回

次之六回

以此如キ

任ヲ妻ノ少シクハ車ヲ御シ世ヲ耐工難クハ身ノ其ノ津秋ニ有リ

又ハ其ノ上ノ心ヲ御シ世ヲ耐工難クハ身ノ其ノ津秋ニ有リ

其ハ其ノ上ノ心ヲ御シ世ヲ耐工難クハ身ノ其ノ津秋ニ有リ

論理

新元天

リズス

是二由テ

之ヲ教ハ

耶教ヲ

又大ニ及ルヤ

事起

是ヨリ年々進テ天ノ徳ニ就クシテ得テ已ル上立位

ヲ以テシテ皇業ニ及ルニ追キスル能ク其由協力カク

レテ各又一事ニ努力スルハ又一時ノ危難ヲ防クニ由ル

今其外務ニ及スル事業ヲ希クシテ友ノ如ク

此一ニ宗教徳性生質 異内

此二ニ宗教ト徳性ト理ヲ区別

此三ニ佛敎ト理ヲ哲學トシテ

此四ニ佛敎ト理ヲ哲學トシテ

此五ニ佛敎ト政次法律トシテ

此六ニ佛敎ト耶教トシテ

此七ニ佛敎ト日本現今社会トシテ

此八ニ佛敎ト開明社会トシテ

佛敎ト開明社会トシテ

一キニハ又又  
 海國オラス  
 アルカラス  
 又道理  
 自由ヲ想  
 常ニラズ  
 高理ノ有  
 ナ多亮ス  
 是レ其ニ  
 耶耶教ヲ  
 教ヲト  
 し自教ヲ  
 興スシト  
 深スシ也  
 三女中ノ  
 伊者耶教  
 教ヲ多亮  
 其又教理

此ハ保ハレテの教家ノ一但欲ヲ得成之ニ  
 人ニ云ハレテハ  
 性ハ其ノ中  
 他教者  
 自由ヲ  
 常亮ス  
 高理ノ有  
 ナ多亮ス  
 是レ其ニ  
 耶耶教ヲ  
 教ヲト  
 し自教ヲ  
 興スシト  
 深スシ也  
 三女中ノ  
 伊者耶教  
 教ヲ多亮  
 其又教理

此ハ保ハレテの教家ノ一但欲ヲ得成之ニ

本海ヲ知  
 リテ後ニ  
 ニアラス  
 勿得湯子  
 ヲ評スル  
 子ノ何久  
 ヲ究メラ  
 評スル  
 ス即シテ自  
 ヲ以テラ  
 其ハ其ニ  
 洋教ヲ批  
 スルモノ  
 ト是レ也  
 余カ以テ  
 一解ヲ使  
 人ノ所ヤ  
 以テテ  
 ニフイテ  
 半九ノ

東京大学文学部本邦  
 明治十八年六月  
 四ノ手帳  
 九月の  
 其田

4  
 東京大学文学部  
 明治十八年六月  
 九月の  
 徳永徳之

2  
 東京大学文学部  
 明治十八年六月  
 九月の  
 物理学部  
 今川良神

1  
 東京大学文学部  
 明治十八年六月  
 九月の  
 標 林信









トラスル以下 即チ理ニ至ル物理學ハ又學久マナ  
 シテ之ニ就テ天知事家万物性道万家ノ善ハ  
 大ハ宇宙全体ノ組織ヨリ小ハ分子離友ノ作用ニ  
 至リテヲ研修シ且此ハ非佛説ニ應テ應用スル  
 如何ヲ思老スルヲ生物ニ流シテ流シテ  
 且此ニ及リテ之ニ就テ生物ノ原如ニ心身ノ關係ヲ  
 靈意ノ失傳ヲ論究シ保テ道化ノ原理ヲ講明  
 佛説ヲレテ且此ニ彼和ヒシ人妙術ヲ思合スル是レ又  
 是レ少シ理ニ中主トシノ物理生物兩方ヲ講明  
 也トト欲スル所以下リ以ニ佛教ノ教規ニ至スル  
 教ニシテ我佛トシテ盛衰利衰ヲ異ニスル所ナ  
 彼ト曰ク時ニ盛ニナルヲ能クシテ我佛トシテ  
 彼レノ信ヲ所シ

佛 教 論 卷 之 一 第 一 章 佛 教 概 論



此四年

之ヲ要スニ佛者今日ノ急務也此等諸科ヲ研究シテ  
 佛敎ノ所従ニ佛ノ面影見エルヨリカニ物理生物  
 諸學子ヲ誘引シテ佛説ト理學トノ交渉ヲ俾ルベシ  
 リカ三ニ即獲敎ノ枢理ヲ透破シテ佛敎ノ真理  
 ト同クスルヤカニ政以道徳ニ性直社舍ノ  
 事情ヲ搜索シテ實際ノ布教ヲ思考スルヨリ  
 是レ墨董ノ所傳外務ノ事業ニ属スルニシテ  
 不方六人<sup>大</sup>勤<sup>勤</sup>ヲ分ケカサ仰セテ又任ニ當ラント  
 スルヤ<sup>故ニ</sup>修<sup>修</sup>先<sup>先</sup>所<sup>所</sup>科<sup>科</sup>ヲ異<sup>異</sup>ニ<sup>海</sup>在<sup>在</sup>中<sup>中</sup>或<sup>或</sup>ハ  
 批<sup>批</sup>テ<sup>テ</sup>子<sup>子</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>導<sup>導</sup>ス<sup>ス</sup>ル<sup>ル</sup>或<sup>或</sup>ハ<sup>ハ</sup>理<sup>理</sup>子<sup>子</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>兼<sup>兼</sup>修<sup>修</sup>ス<sup>ス</sup>ル<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>  
 他<sup>他</sup>ノ<sup>ノ</sup>早<sup>早</sup>業<sup>業</sup>ノ<sup>ノ</sup>後<sup>後</sup>ハ<sup>ハ</sup>只<sup>只</sup>科<sup>科</sup>ニ<sup>ニ</sup>相<sup>相</sup>應<sup>應</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>佛<sup>佛</sup>子<sup>子</sup>ヲ<sup>ヲ</sup>講<sup>講</sup>明<sup>明</sup>  
 シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>生<sup>生</sup>カ<sup>カ</sup>シ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>修<sup>修</sup>メ<sup>メ</sup>テ<sup>テ</sup>今<sup>今</sup>ノ<sup>ノ</sup>定<sup>定</sup>先<sup>先</sup>所<sup>所</sup>ノ<sup>ノ</sup>自<sup>自</sup>由<sup>由</sup>也<sup>也</sup>

ヲ達セシメテ即チ之ナリ今ノ學ニ又ハ二の修之

ス所及也他ノ事業ハ兼修セシムル欲スノ事業

目的ヲ圖陳スルハ如シ傳フ宗教ノ原理

(四) 夫人在之也 哲學法科ヲ專修シ別ニ此正務

佛口耳受抄字ヲ講究シテ其業ハ兼修スル

佛教全體別ニテ學云天ノ法ヲ修メテ

ニテ哲學原理

(五) 夫人在之也 哲學法科ヲ專修シ別ニ此正務

抄字 兼修字ニテ講究シテ其業ハ兼修スル

ヲ兼修セルラス傳フ宗教ノ原理ヲ修メテ

(六) 夫人在之也 物理字ヲ專修シテ其業ハ兼修スル

兼修ヲ講究シテ其業ハ兼修スル

抄字 兼修字

教中ノ諸在ヲ陳列セリ  
耶三種ノ一  
佛學ノ一  
儒學ノ一  
史記

(甲) 及人 在 字 中 哲 子 法 則 約 之 天 倫 理 政 理

佛 教 中 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

ヲ 兼 修 之 宗 教 社 會 南 宗 佛 教 明 日 也

(乙) 及人 在 字 中 哲 生 物 子 子 修 心 身 道

ノ 理 ヲ 佛 教 中 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

カ 之 以 及 人 在 字 中 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

此 名 之 印 度 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義 佛 教 兩 義

ヲ 辨 明 之 也





過半

如刀端

お知り積

り40里サ

紅子一

野ノ一

且克情  
尾ノ又  
言ヲ尾ノ

出ニテ葉ノ人 五ノ辰候ハ言物ノ始ト不候ト

ニ為スヨリ在ニテ止候事ノ如ク言物ノ終ト

アリテ止候事ノ如ク言物ノ終ト

中道ニシテ

而シテ止候事ノ如ク言物ノ終ト

始ノ以テ止候事ノ如ク言物ノ終ト

五ノ葉也又ノ日ニ至ラハ一也又ノ下ニ相合ス

多ク手ノ當事ノ而ニ至ラハ一也又ノ下ニ相合ス

相放計候事ノ而ニ至ラハ一也又ノ下ニ相合ス

西ノ如ク

極

91 × 23 卷 = 2093

斗聲ノ殿ノ下ノ邊ノ設リテテ舊時ノ儀供也 由外  
 ノ學ヲ修ムテテ是ノ此ノ經ノ相ノ當シ宗教ノ道  
 理ヲ傳スルニ由ル外ノ耶ノ禮ノ教ノ語ヲ對シテ  
 又テ敗レテテ防キ由ル伊ノ者ノ未レ依ル對シテテ又テ信ん  
 々ニ地ノ經ノ即チ以テ經ノ信ノ云々中ノ口ノ本ノ教  
 由ル經ノ傳ルトナサニテテ是レ未レ夕ノ傳ノ教ノ中ノ也ト不  
 也ト仙ノ者ノ手ノ又テ以テ所ノシテ我ノ宗ノ經ノ以テ外ノ經ノ而レ經  
 ノ後ノ人ノニテ是レ乃レ我ノ本ノ山ノ人ノ不レナリ而レテテ自レ教  
 性ノ所ノテテ所ノ修スル所傳ル由ル神ノ事ノ業ノ本ノ山ノ已レ  
 又テ人ノニテ是レカニ安シ密ノ障ノ街ノ務ノ云々又テ古ノ方ノ  
 又テ人ノ多シ清ク墨ノ多クシテ經ノ又テ未レ夕ノ研ノ傳ル  
 又テ人ノ多ク所ノ傳ル外ノ務ノ事ノ業ノ二ニ從ルハレテテシテリ

